

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	使命發展の三拍子：論説
Author(s)	谷，龍之介
Citation	龍南會雜誌， 1 1 1： 1 9 - 3 5
Issue date	1905-05-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5816
Right	

使命發展の三拍子

谷 龍 之 助

快なる哉、大局既に決し前途尙は遼遠ならざるに非ざれども、勝算歴々として我れに在り、冲天の旭日は茲に世界の迷梵を一掃し盡して、鮮明なる旗幟に絶大の權威と無限の光榮とを載せし、萬有最大の偉觀たるべきは正しくその然るべき所、更に所謂戦後の經營なるものに到つては、吾人新青年の靈腕に依りて遺憾無遂行せられん乎。盤石時ありてか動くべく泰山或は安からざるべきも、唯一我が大帝國に於ては天地と共に長久ならむのみ。抑も何の祝福か之れに若かむ、吾人生を當代に享く、豈自己存在の意義を全うせむのみのと云はむや。一語「戦捷大帝國」、耳朵を打つて衷心に徹するの響は眞に大和民族共通の然かも獨得の神韻にして、幾多縷の如き餘韻は嫋々として滿身の脉搏に漲るを如何。

歴史は何をか繰り返へす、大なる事業は大なる國と人とによりて成就せらるゝ事是れなり。その兵員にその舞台に更にその仕掛けに見よ。日露の戦争は戦争その物に於て既に一世の驚嘆を價ひすべき空前の大業にあらずや。幾十年來の恨は發して、油然、沛然、滔々然、唯一半島の運命と云はず、唯に「老大國の版圖と云はず、將た又色の黄と白とを云はず、實に之れ眞入道の正を蹈みし眞人

の文明に達せむとする一大進歩の代價に非ずや。人の子何ぞ荆棘の路を撰ばむ、然かも靜かに自己と同胞との發展を思ふ時、勃然として一種靈妙の威力に感奮せしめられ、遂には天馬の空を驅るが如き域に到達せむ。荆棘何するものぞ、萬里の風波も醉顏の春風と異なる事無し。然り吾人は既に事實に於て幾萬の生靈と幾億の金額とを犠牲に供しぬ、更に近き將來に於て幾許の要求あるべきも毫も意とする所に非ざるなり。斯くの如くにして日露大業の第一序幕は開かれぬ。暫く彼れをして彼れたらしめよ、遠かれ將た近かれ、いつかは戰捷大帝國なる雷霆の威に形然たる大國の黔首舉げし聲無きに至るべし。此時ぞそれ我が大帝國の大業は、その一端を了へて更に一大使命の途衍に入らむ也。然かも天下の大業は戰爭のみに非ず、現代の日本大帝國の一大使命は唯々戰捷者たるの名聲をして宇内に喧傳せしむるのみに止らざるなり。請ひ問はむ我が大帝國の使命は現今の大業を了へて抑も如何にして發現せらるべき乎、將た又所謂東洋の平和と文明とは如何にして遺憾無く發展せられなむ乎。

龍頭を以て大業を始めしの吾人は決して蛇尾の結局に満足すべきに非ざる事云はずして明かなり。今回の事一に陛下の御稜威によると雖も、亦天の時あり地の利あり、然して更に人の和あり。大勢滔々として恰も朝嗽波を蹴て金箭八紘に輝くが如く然るもの、何ぞそれ偉なるや。加之、その標榜する所は人道の正と文明の義とに在り。眞に之れ右手に干戈を擁するも、左手に薰風脉々たるの蓮花を載するもの何ぞ又美なるの太甚しきや。身を挺んで起ち國を略して戰ふや、自づからなる偉觀と美容と併せてその内にある以上は、王師凱施して霞關の繁劇層一層なる時代に於て、既に着々發

展しつゝあるべき我が大帝國の使命は、又正にその起因と犠牲とに鑑みて、美花ありて果實無きの愚を繰り返へす事勿らしむべきなり、試に思へ過去十年の星霜は吾人日帝國の熱血漢に如何の消息を與へしとするぞ、過去をして過去たらしむべきも斯くの如んば東海の君子國、餘りに御人よしならずとせむや、愚直稍々愛すべしとするも支拂ひし相當の代價に何をか得たる、今や即ち之れが追懷は信念となり、吾人が帝國の使命に就て動中の靜觀を逞しうするの時、劈頭一聲、偉ならしめよ美ならしめよ、然し之れが遂行の第一着は先づ購和條件締結の如何にあり、之に一大使命の端緒なりと叫ばしむ。

請ふ吾人をして今日より購和に就而云爲する想像と自由とを有せしめよ、固より戦争の進行、時局の發展、乃至は列國の態度等によりて之れが條件を左右すべきものなる事吾人之れに氣付かざるに非ざるも、然かも一点の杞憂を要せざるを如何、戦争は如何に進行すべきやとの疑問を發するものあらば、答ふるに我が大帝國は何が故に旗鼓を動かして起ち、起ちて如何の活劇を演じつゝあるかを以てせよ、時局の發展如何に對しては仰いで天上の日輪を拜せしめよ、見よその燦然たる光輝は野の花をしてだに大王の榮華より美はしからしめむとするに非ずや、敢て列國の態度と云ふを止めよ、あらゆる偽善と憎惡とは眞個偉と美との前には寸毫の施す所無きを認むべし、列國をして假りに惡に強きものとせむもその善に感すべきは亦甚だ強きに非ずや、忽焉として天外の美人降る、神采端嚴にして一指を加うべからず、玉步靜かに薰風疎々として人に逼るの時、如何の無賴漢と雖も敢て之れを犯す能はざるを見る、列國吞噬の爪牙を擁して豺狼飽く無きの欲を擅にせむとするも、

深谷鳴動して一大獅子吼の清音に打たるゝ時、何すれど能く區々の情を放抛し盡さざるものあらむや、安じて可なり戰捷大帝國購和の要求條件は、十年前を一夢に附して、時代は既に隔絶せるの今日、雨足つて千山緑なるが如く、敢て他山の石を玉に用ゆるの外飾を要せざるなり、然らば即ち無限絶大の權威を以て之れに臨むの時、唯々として我が意は充たされむのみ、望蜀の念亦必ずしも不可ならず、犠牲は愛すべき我が同胞、代價は渾て是れ國民の膏血、滿幅主張の發展無くむば吾人の溜飲遂に下る事無けむ、斯くの如くにして旅順大連の讓與樺太の還附は未だ小なり、地にしては貝加爾以東東部西比刺亞もよけむ、金にしては數十億万留もよけむ、明晰なる頭腦に幾多の利害關係を打算し來つて、微塵の遺憾無からしむべきは、主として是れ當局者の任する所にして、成竹己に方寸の中にあらむを以て、吾人暫く之れが爲めに架上の論を謹まむ乎、然かも抑も吾人が購和の要求條件を以て我が帝國使命發展の第一歩となすもの、別に多大の意義あるを思へばなり、敵は頑冥不靈なり、或は馬鹿の骨頂なり、之れに服用せしむべき好箇の藥種無きを知らば、誰れか最後の鐵槌を下してその半死半生の苦痛を嘗めしめむよりは、寧ろ寂滅爲樂の彼岸に到達せしめむ事、高義の武士文明の國家が施すべき無常の恩恵に非ずとせむや、能ふべくむむば吾人は彼れを屠り盡して再び天日を仰ぎ見る能はざるに到らしめむのみ、然りと雖も悔悟の涙は人生の最も眞善美なるものゝ一にして、吾人は之れに對して惻々として動かされざらむと欲するも能はざる優婉の情に富む、彼れは今正に一大悔悟の前に立てり、少年の紅顔にも野夫の蓬頭にも潜々として涙下る事數行、果然彼れは一大秘密を發いて、眞個人間の絶叫は到る處に風生すると聞く、吾人豈一点の同情無きを得

むや、眞一文字に屠り盡すの日本刀は、玆に變じて彼れが一大自覺を呼び起すべき恩威並び備はる打出の小槌となり、大帝國戰捷の意義は更に幾多の光彩を添ふ、暫く寶刀を以て彼れが頭に加へつ轉じて彼れが涙にその血痕を洗ひ盡して、彼れをして、光明の人とならしむ、一刀兩斷は簡にして盡すも、その酷や遂に溫顔涙を拂ひやるの愛に若かざる事遠し、斯くて吾人は戰局收拾の際に於て既に恩と威との兩面を併せむとす、恐るべきは二兎を追ふものゝ一兎を得ざらむとするの恨だれなり、購和の條件が多大の意義を有すとなすもの、誠にその然るを覺わすむばあらざるなり、是に於て乎彼れをして再び起つて我れに抗する能はざらしむるは威なり、彼れをして涙乾ける後長しへに我が高德を拜せしむるは恩なり、購和の條件はこの兩前提より推出せられたる斷案なるべき事、固よりその然るべき所に非ずや、咄何等の沒曉漢ぞ、旅順陥落と奉天占領とを以て正に購和の時機となし、戰後直ちに日露同盟を結ばむと云ふ、然り兩者共に以て恩威並び備ふるの一方便とすべからざるに非ず、之れを敗敵者の口より發せしむる或は一種の策略として可ならむも、戰捷大帝國赫赫威の下に立つ我が同胞をして徒らに附和雷同せしむるが如きは、即ち全きを致す所以の道に非ざるなり、大恩を忘るゝもの世に之れあり、大威に屈せざるもの亦然り、況んや今回の我が敵に於て何すれど能く區々たる恩威に心服するものならむや、大なる恩威を以て大なる効果を收めむとす、宜しく大抱負と之れに伴ふ大手腕とを以て之れに當らすむば、即ち九仞の功を一簣に欠くの愚を再演せむのみ、今回の戰爭は慘の慘なるもの、酷の酷なるものなる事は之れを大聖に聞かすして明らかなり、人類最大の憂患たる修羅の巷をして文明の現代に一日たりとも存在せしむるは、吾れも人

も之れを欲せざる一大耻辱、且つやその敵を愛し百年の恨を一朝にして拂ひ去るべきは、寔に人の子靈長たるの所以なり、早くも購和と同盟との風説傳はるもの正に這般の情緒より溢れ出でたるもの、吾人諒とせざるに非ざるも、然かも事の完成を欲しその慘禍をして敢て再發せしめざるを欲して、未だ之れに傾聴せざるものは、徒らに理想に馳せて現實を忘るゝに非ざるなり、將た又斯くの如き風説が、或る一派の人心を沮喪せしめむとするの杞憂を抱くものにも非ざるなり、唯一患ふる所はかの購和條件の兩前提をして遺憾なく遂行せしめむと欲する熱望あるが爲めに外ならず、吾人の主張は圓滿に充實せられて茲に始めて我が戰捷大帝國の使命はその一步を完全にするを得むなり、苟も購和の條件にして寸隙の存するあらむ乎、是れ我が敵に對する使命に於て既に一步を謬るもの、故に曰く完全なる購和條件は是れ我が大使命遂行の先鞭なりと。

戰捷大帝國使命の端緒たる購和の條件は、茲に間然する所無く締結し了んぬ、滿都の歡聲湧くが如く、人は空前の光榮に酔ひし人間得意の最高潮に昇れるの時、上は内閣諸公より下は一兵卒に至るまで論功行賞の御沙汰は下りぬ、列國の讚辭は山の如く外より之れを煽動して、東海の大帝國正に千仞の春色に満たなむ、戰勝紀念の大建築物はそこに雲表に聳たり、戰勝紀念の大演劇はそこに人目を眩せしむ、朱髯緑眼の奴さん、いさ見にこんせ戰捷大帝國のこの御有様、百年の齡は必定なりと、煮ても焼いても喰へぬ噴火山的大和民族の好機嫌の程こそ、推し計るだに快心の事なりけれ、この時に乘じて我が帝國をして希臘たらしめよ、文學と美術とは戦後の餘勢に乘じて以て國家の裝飾たらしめ、將た又我が帝國をして羅馬たらしめよ、政治と法律とは戦後の餘勢に乘じて以て國家

の金冠たらむ、然れどもその末路の哀れむべきを如何、さらば第二の英國たらしめよ、海軍の強は以て世界に誇るべし、將た又第二獨乙たらしめよ、學術の盛は以て萬邦に表彰せらるべし、是れ亦快ならざるにあらざるも、靜かに我が使命の如何を思ふ時、外に發せむと欲して先づ内に顧る所無くむばあらず、換言すれば吾人は戰捷によりて物質的報酬以外に如何の教訓寧ろ自覺を得たるやを考察せむと欲するものなり、乞ふ吾人をして少しく内面的觀想に入らしめよ。

由來太和民族存在の中心は皇室なり、その發展は國家なり、而して二千五百有餘年の活ける歴史を作成し、之れを古今に通じて謬らざる我が靈界の主宰は實に是れ武士道の精神そのものに外ならざるなり、開戦以來幾多の自覺は何物をも雲烟過眼視する能はざる吾人同胞五千万の腦裡に、そも幾度か彷徨したりけむ、唯に軍人のみにあらず、軍人の自覺は亦國民そのものとそれと知らずや、旅順の攻圍に於て一個人乃木希典の自覺は又忽ちにして王候將相より、兒童走卒に至るまでのそれとなる、堅忍不拔の語は早くも金科玉條となりて骨隨深く鏤刻せられ終んぬ、然りと雖もかの武士道精神の自覺の如く、然かく滿腔の熱血と確信とを催せしめしものあるべきや、妻子は病床にあり、父母は頻死の苦に叫ぶ、露營月下の夢は醒めて、鴻雁をうろに人を咀ふが如き時、英雄の石腸も覺はず寸斷せむとす、さあれ此の時忽焉として一縷の明星懷に入るや、身は優然として落花繚粉の裡にあるに異らず、頼むに師長無く、依るに血縁無し、讀まむと欲して書を得る能はず、食はむと欲して蔬菜を得難し、然かも向上の一路を辿りて勇往邁進、人生の苦を塵芥に比せむする自面の一書生、満身の血球はに夫れ抑も何をか満たせる、武を行ふに這般の精神あり、文を行ふにも亦然哉。

斯くて文明の大戦捷に於て、軍器に非ず、糧食に非ず、實に全精神界を統一して中外に悖る事無き眞大和民族の武士道的精神そのものに對して、已に千万の花環は捧げられたり、列強の拍手喝采湧くが如く、遂にはその自國にも尙ほ斯くの如きものあるを稱して、その光榮の一半に浴せむとする欽羨垂涎の情も、誠に以てその偉大なる感化を見るに足るべく、況んやこれが本尊たる我が同胞に於てをや、然りと雖も吾人は今茲に事新しく蛙鳴蟬噪して、之れが吹聴に勉むとするものに非ず、既に建國の初めより遺傳的に成長し來れる武士道の精神なるものゝ實例や、教訓や、意義や、將た又價值やは我が二千五百年史の如何なる一端にも髣髴として出現するを認むるもの、功能を説くの多言は遂にそが神聖を瀆さむ事を恐る、今回の事空前の大業なるを以て又之れに處するに空前の大意氣を以てし、その結果としてそが發現の量に於て亦多大なるに過ぎざるもの、眞理は一にして理由を要せず、何すれど武士道の精神に於て二つあらむ、特に今日に於て之れを喋々せむや。

大和民族なる一大庭園の中、武士道の荅は開いて花となり國家と云ひ、結んで實となり皇室と云ふ、之れを三位一体となすも蓋し當らざるも遠からざるなり、一を欠いでそこに大和民族存在の意義無く、そこに活動の精華なし、あらゆる權威と光彩と理想とは、渾てこの三者より發揮するの權化に外なからざるを覺ゆ、誰か云ふ大日帝國には個人の存在と人格の偉大となし、かの戦敗の露國はよし國亡び民散するも、神力の偉大を一身に負ふて、龍の如く虎の如く雲を呼び風を起すの大聖、伯トルストイを有するなり、皇室と國家と武士道との以外に「世界の人」なるものを有せざる國家は憐れむべき哉と、然り吾人は彼れが如き大天才に多大の敬意を拂ふを惜しまざると共に、亦我が同

胞中に斯くの如きの人物が出現せむ事を渴望し、更に個人の價値を認識するに於て敢て人後に落ちざるを欲するものなり、然かも何が故にトルストイを偉大となし、個人の價値を重しとなすや、是れ即ち高潔正大の理想を抱いて、之れに勇往直進するの大氣魄あるを以てに外ならざるなり、今茲に國家あり、人道の正と文明の義とを蹈みて遂には千古の大戦を催すに至るもの、之れを偉大なる國家と稱せずして何ぞや、而して偉大なる國家の下に統一あり秩序ある偉大の業を完成するもの、同じく偉大なる國民は之れを個人として即ち偉大なる人格なり、將た又價値あるのそれなり、和樂、春風の温あり、端正、秋霜の烈あり、圓滿にして力ある家庭に人となる、夫婦は國家社會に出て、紳士となり淑女となり、兒女は第二の良民としてその中に鞠育せらる、斯くの如きの夫婦兒女は之れを個人として價値なしと云ふや、價値あるの個人、偉大なるの人格が相集まつてそこに價値あり偉大なる家庭存し國家存し社會存するあるが如く、價値あり偉大なる社會國家家庭の下にあるものは、即ち亦個人として之れが偉大と價値とを認めずむば非ざるなり、由來大和民族の事業は精神界に於て物質界に於て總てその對象は國家にあり、所謂「御國の爲め」にするの結果万事は國家的に出現せられたりき、而して今や國家は世界の平和と文明との爲めに大戰を賭するまでに盡瘁せるの現代に於て、國民何すれぞ獨り非世界的なるを許容すべき、その國家的なるはやかて世界的なると一般、茲に個人として「世界の人」となる誰か不可なりとせむ、是に於て乎吾人は一人のトルストイを有するも、專制政治の惡夢に呻吟する皇室と汚吏と、幾万無辜にして奈落の底に叫號する蒼生とを如何ともすべからざる國家と、吾人が籍を置くそれとは、實に比較すべからざる懸隔あるを見る、

若し夫れ我が帝國にしてトルストイを要すとせば、そは一個のそれに非ずして五千餘万の同胞皆一朝にしてトルストイたるのトルストイに外ならず、吾人は一個人の價值と偉大とを以て僅かに國家の光榮となすに満足せずして、全國民即ち國家そのものとしての偉大と價值とを以て光榮となすもの、然り大日本帝國なる名辭は、皇室國家及び國民があらゆる點に於て偉大なると價值あるとの屬性を表現するものとなさむと欲す、さあれ吾人は所謂日本人なるものの特長を知ると共に又たその短所をも了解する能はざる程に野暮ならざるもの、我が同胞が眞に世界の人として成功し畏敬せられ親愛せらるゝかに就ては、幾分の疑念無きを得ざるなり、國家としては完璧なるも個人としては甚だ然らざるを見ることは外人の常に口にする所、吾人は決して日本人なるものか個人として外人に劣れりとは斷するを得ざるも、然かもその國家的に體現せらるゝ人格と個人的に然かせらるゝそれとは、確かに幾分の徑庭あるを見るものなり、徒らに短所を挙げ泰西の文物を謳歌して我が大和民族の性格に資せむとするも、そは角を矯めて牛を殺すの類にして識者の加減すべき所、唯云ふべきは一事の頗る簡單なるにあり、曰く日本大帝國行動の對象は世界の平和と文明とにあり、個人として國民の行動する場合に於て亦正にこの意を體して誤らざるべし、武士道は國家的に發現すると共に亦世界的に擴張せらるゝ國家的に價值ある人民は亦世界的に偉大なる所謂「世界の人」となる、是れ戰捷大帝國使命の外に發せむと欲して先づ内に充實せるもの、即ち世界に對する使命の内容たらずむばあらざりなりと、此の自覺あり以て世界に王たるに足る。

夫れ秀靈の氣内に充ちて、發して萬葉の櫻となる、旗鼓堂々として東亞の天地を壓倒せし大帝國の

光彩は、譬ふれば日輪のその如く、今や全人類に透徹せんとす、普天の下之れを仰がざる無く、率土の濱之れに浴せざる無し、げにや日東大帝國の豺豕と艦艦とは、戦はむが爲めに萬里の風波を侵ししに非ずして、正しく誅せむが爲めなりしなり、天下百性を紊るの暴國を誅し終つて、萬邦均しくその明德を頌歌するを思へば、吾人頂天立地の男子漢、意氣斗牛を吞まむとして、拍案快哉の極まる所を知らざるべし、然かも顧みて内に牢乎泰山の如き自覺あり、五千餘万同胞の熱血は、よしその量に於ては少しとするも、その質に於ては一滴にしてよく人の子の肺腑を衝くを得むなり、斯くの如き光榮ある權威の下に、斯くの如き自覺と抱負とを以て、渾圓球上東より西に、南より北に、その双臂を延ばす時、果して如何の花を開いて如何の實を結ぶを得べき、吾人靜かに之れが發展に對して幾許の感懷を述ぶる亦可ならむ乎。

已に誅を終れるの大帝國は或は威厲にして用ゐざるべきも、然かも外交の敏活は我が大使命の發展が要求する最大の手段たらずんば非ざるなり、由來樽俎折衝の事唯に外觀を以てのみ云爲するを許さざるが故に、果して大帝國のそれが甚しく識者の嘲笑を招くべきや否やは明らかならざれども、而して又公明正大の裏面には、鐵と鉛とを含むべき性質のものなるが故に、優柔不斷の通用語を以て罵倒し去るべきに非ざるべきも、唯一我が大帝國のそれは武力に比して敢て敏活ならざりしは、斷乎としてその然るを覺ゆるもの、吾人は遂に外交當局者の血と涙とは一般大和民族のそれに比して、或は少しく稀薄ならざるかを疑はざる能はざるを如何せむ、吾人未だ直ちに起つてその局に當り、或は之れを鞭撻すべき地位に非ずと雖も、使命の發展は永久なり、今にして是等の言を爲す

は即ち吾人が將來に於て力ある追懷たらしめむと欲するに外ならざるなり、然り而して外交の敏活は先づ之れを對清の交渉に見むと欲す。

屹然一大國を爲すも撿覈し來れば總て是れ精神病患者の集合にして、列強侵略の標的となれる老清の近狀、之れを誘掖し之れを改善するの任を有し、兼ねて恩と威とを備ふるもの、誠に日本大帝國に若くは無し、何事ぞ徒らに列強の鼻息を窺いて一葦帶水の我が國家と國民とは、手を袖にする傍觀の御人好しを以て満足し、爲めに幾多高價の犠牲を支拂はざるべからざるに至りしとは、是れ一に外交の手腕に欠如せる確證たるべきも、又更に一つの障礙ありしを以てに外ならざるなり、障礙とは何ぞや、所謂往年の恐露病なるもの即ち是れ、吾人は今之れを詳説せずと雖も、さらぬだに外交の不敏に加へてこの一大障礙が如何に我が清國に對する使命を耻かしめしかは、無念骨隨に徹して夢寐にだに忘るゝ能はざる所、然して今や即ち之れ無し、然らば吾人は一朝にして清國を操縱する事意の如くなるべき乎、否乎、請ふ少しく思ひを致さむ。

東海の一孤島、武陵桃源の夢醒めてより僅かに三十年、泰西の文物を注入する事長鯨の百川に於けるが如しと雖も、由來小國の民何の爲すべき所が之れあらむ、日清戰役と云ひ、北清事件と云ふが如き蝸牛角上の争には、或はその僥倖の利を得たりと雖、苟も歐州最大強國との大戰に對しては、是れ螳螂の斧を振ふが如きもの、鎧袖一度觸れなば千軍萬馬立どころにその身首を異にせむ、余れに此の確信と實力とあり、外交の事掌を反へすが如く、清韓喝んぞ我が麾下に平伏する事蜘蛛の如くならざるあらむや、笑ふべきは彼の小國、徒らに之れに容喙せむとして、よく負け惜しみの言

を爲すと雖も、今に見よ、汝の國と民とは亦我が掌上に翻弄せられて、終には我が腹中に葬り去られむのみと、斯くの如きは是れ露人が戦争以前に於ける日本觀と、その外交の一点張なりし所以なりとすべし。國大に兵強し、歐亞兩大陸に跨りてその威を振ふや、端倪すべからざるの怪麗を以て、その大氣魄と大抱負とを實現せしめむとす、是に於て乎歐洲列強も尙ほその鋒を避けて、一意之が意を害せざらむ事に汲々たるに非ずや、その清國を割取せむとするも之を見ざる眞似するに越したる事無し、我が帝國が害を受けざる限りは、万事その成に任すべし、若し誤つて彼れの赫怒に逢はゞ之れ毛を吹いて疵を求むるもの、危い哉、猥りに清國に就て云爲する事勿れ、何となればこれかの強露と事を開くの端なればなり、故に對清の外交に於て沈黙は最上の策略なりと、斯くの如きは是れ我が帝國廟堂の諸公が開戦以前に於ける露國觀と、而してその外交の眠れるが如くなりし所以なりとせむ乎、已に外交の土俵に於て兩力士の意氣に雲泥の差ある事斯くの如くむば、その勝敗略々推知すべきのみ、實力如何と云ふ事勿れ、人間の意氣は即ち實力を喚起するものと知らずや、更に我が帝國は常に立ち後れの不覺を取れり、彼れはその意氣と機先を制するの敏捷とを以て、滿潮の如くに推し寄せ來る、果然軍扇は彼れの頭上に簪されたり、吾人は外交の一語を聞く毎に這般の消息を想起し來つて、血涙の滂沱たるを禁する能はざると共に、今回の大戰に一敗地に塗れて再び起つ能はざる彼れが運命を默想し來つて、踴躍三百せむとするもの、然かも一轉して將來の對清外交に想到すれば、更に一種の感慨油然而として湧出するが如し。

對清の外交は即ち對露及び對列強の外交たるべき事、是れ自明の理なり、思ふに堪へたり敗露の遺

恨、裏きにはヒーター大帝の遺訓を奉じて破竹の勢を以て猛進し來りし彼れが使命は、茲に端なく我が大帝國のそれと衝突して、一撃の下又起つ能はざる運命となれり、思ひきや彼れは春の花を夢みて空しく秋の木の葉と散りぬべきとは、戟を執つて再び起たむか、我が武士道に勝つべうも候はず、財力を以て相拮抗せむか、内に幾許の富ありや、將た又將來の財源地と頼むべかりし清國は、最早御手のものに非ざるを如何せむ、若かず暫く對外の經營を捨て専ら内政の改革に従事すべきか、革命の火の手は既に天を燒きぬ、正に是れ專制の惡政を抛つて、立憲代議の美を求めなむ時は來れり、然りとて、外は野となれ山となれ、君民相擁して内に溫かき團結を成さば足りなむ、思ひ切れば斯くてよかるべきを、諦められぬが浮世の常なり、泥醉せるものに向つて飲酒の害を説く、何の得る所ぞ、彼れが人生は今酒にあり、外邦侵略を以て唯一の能事となす彼れにありては、之れを好む事色よりも甚だしく、之れを奪はるゝ事生命よりもつらかるべし、然らば何によりてかその生命を維持せむとするや、武力に非ず、金力に非ず、餘す所は唯一外交の怪力あるのみ、凡そ武力に伴はざるの外交は鬼面人を威かすが如きもの、到底片手落の手段たるを免れずと雖も運用の妙如何によりては、亦以て愚者千人の世に跋扈するに足るべきは、彼れ露國が多年の經驗に徴して自覺せる所、之れを措いて他に又求むべきを見ざるなり、之れを輕視せば強弩の末勢なり、魯縞をだに穿つ事能はずと雖も、之れを重視せば江戸の簪なり、長崎にて打たるゝの憂無きに非ず、而して重視輕視共に非なり、知らずや力士梅ヶ谷は四十八手の蒔鞆を極め盡して、その術に於ては天下無双と稱せらるゝと雖も、その屢々不覺を取るは是れその強からざるに非ずして、已れの鉢量と技術とに打

敗けたるに外ならず、兩國よくその氣合を知りて彼れを破る事兩三回、是れ他に非ず得意の外交を以て正々堂々の戦を避け、彼れ大關の鉢量と技術とを極度までに利用するによるものにして、勝つに非ずして敵をして自づから倒れしむるにあり、這般の消息を解するものは、日露將來の外交土俵に於て、十分の覺悟を要すべきを知らむ哉。

昨は東海の一孤島、今は世界の最強國、活眼達識の士は人道の正と文明の義との爲めにその然る所以を知りて、その功德を感銘せむも、悲しむべきは他の偉と美とに對して衷心妬忌猜疾の念に堪へざるものと、及び雲煙の如く過眼視し去つてその所以を知らざる、所謂女子と小人なるものゝ隨分養ひ難きにあり、然かも知らずやその最も甚だしきは我が改善し輔導すべき清國の輩なる事を、幸にして我れに心服し、萬事我が成を仰ぐに至り、政務漸くその緒に就くを得たりとせむか、花開いて雨多し、雨たるべきは露國の外交、更に加ふるに雪と風とを以てするものは歐洲列強中某國のそれたるべき事、豫想し來つて殆んど眞を凌がむとするものあらむなり、嗚呼滿天の風雪を一簣に受けて、巍然として男子滿腔の意氣を示すは快なると共に又容易ならず、大日本帝國の外交宜しく萬丈の光焰を發せずむば、夫れ我が帝國の意氣を如何せむ、而して更らに自己の鉢量を操縱する事掌を運らすが如くならすむば、或は轉倒して美はしき衣の一片はあはれ汚泥に浸されやせむ、希くば喬木挺然として暴風を凌ぐの意氣と手段とあらむ事を、對清の外交夫れ之を思はずや、苟も對清の外交にして延いては對露對列強の外交にして間然する所無からむ乎、我が帝國の使命はその前半を全うするを得む、何となれば東洋の平和と文明とは斯くの如くにして維持せらるべきればなり。

若し夫れ韓國に對しては之れを外交と稱すべきものに非ずして、その經營と施設とは寧ろ内治の一端を以て目すべきもの、(例へば外交時報記者の韓國御國管説の如き)、之れに對しては敢て外邦の干涉を許さざるなり、時は今戰を交へつゝある間に於て、既に業に幾多の種子は蒔かれたり、旗鼓を撤して凱歌湧くが如きの時は、早くも雙葉の發生するを見む乎、吾人は之れに就て特に對外の交渉と稱するを用ゐず、見よその事實的例證は日に月に韓帝國新歴史の第一卷を起稿しつゝあるに非ずや、然り事實は即ち説明なり、吾人は今日に於て寧ろその進行の如何を默視するの大人らしき態度を取らむと欲す、豈に必ずしも辨するの要あらむや。

論じて茲に到る、吾人は急がずして自づから結論の來るに遇ふ、完璧微瑕を点出する能はざる購和の條件と、堅實一指を加ふる能はざる自覺と、及び敏活他の左右するを許さざる外交との三拍子合して、茲に六馬仰抹し、流魚出聽するの妙樂は、東海の大帝國より縷の如くに奏出せられむ事、眞に疑ふの餘地無けむ、況んやその演奏の題目に到つては「使命の發展」と云ふにあり、恰も是れ天鼓六合に響いて、幢蓋幡綵覆載の間に展轉するの妙あるもの、人間これより思ひ邪無し、斯くの如きの靈樂に聽くを得ざるもの若しありとせば、そは眞に禍の子なる哉。思ひ到れば皆是れ將來の事、萬斛の熱血一時に湧いて、之れが中流に掉さむと欲するもの所以なきにあらず、或は泰山前に倒るゝも、江河後へに溢るゝも、天地にしてその存在を失はずむば、妙音は絶えず舟中より起るべし、げにや戰捷大帝國使命發展の南斗北斗は、一点の雲翳なく燦として星宿花に似たるが如し、又何をか云はむ、唯顧みて吾人の言餘りに描象的なるに過ぐ、されどその具体的説明と實例とは即ち懸つ

て吾人が双肩にあり、偏へに將來の飛躍に俟つ、寧ろ言はぬが花の趣あるに若かざるを如何にすべき、將た又吾人が日夕拮据經營する所以のもの、徐ろに之れに資するあるを以て、何ぞ必ずしも佛陀に法をか説むや、要は一大觀想を抱いて長しへに感銘するにあり、斯くの如くにして戰捷大帝國の大使命は、遺憾無く發展せられむのみ。

(明治三十八年三月稿)

